



2016. 10. 24
Vol.3

GIRLS BE AMBITIOUS

★ガールズ・ビー・アンビシャス

～SGH活動報告～

スーパーグローバルハイスクール
活動の様子よく分かる！



NEW FACE
デビュー！

2016.10.15 中間発表(2018 年度 I 年 5 組)

- ◆LS の I 年生 SGH 活動報告・・・後輩誕生！～プログラム始動～
- ◆LS の II 年生 SGH 活動報告・・・課題解決策の提示活動&論文作成
- ◆サーバント・リーダーとの出会い・・・河野美奈子氏（外務省）
- ◆アクティブラーニング～哲学対話の実践～

☆光！SGH 生徒の活躍…受賞の報告！！
& Let's challenge !

★英語弁論大会1位！東北大会へ！！
★ビヨントウモロージャパン未来リーダーズサミット2016 優勝
総理公邸でのスピーチへ！！

平成 28 年度 高 I SGH 始動！

文部科学省よりSGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受けて2年目、平成28年度の高I LSコースでも課題解決型探究活動(GSLプログラム)が始まりました。

4月15日(金)の「SGHガイダンス」では、仙台白百合学園のグローバル・サーバント・リーダー(GSL)プログラムについてガイダンスを受けるとともに、1年前から活動を始めたII年生の探究活動の発表を聞き、これから始まる探究活動の目的や実施の方法、先輩たちの取組の様子を理解し、期待を膨らませました(^o^)

同日の新入生合宿ではいよいよ「SGH入門」。「白百合学園が目指すグローバル人材とは何か」、「課題解決型探究活動とは何か」、「探究5領域(環境・企業・食・医療福祉・教育)の理由」、「GSLプロジェクトとは何か」について説明を受けました。



【II年生からI年生への発表の様子】



4月下旬からは「学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション(玉川大学出版)」を参考に、探究活動の基本を学びました。図書館やパソコン室で調査活動を行った後、クラス内で各自が調査した内容を分かち合いをしました。II年生の発表の様子が印象的だったのか、グループワークや発表もなかなか積極的でした。

5月は探究班を6班編成し、班としての探究テーマの決定、6月にかけて探究計画書を作成しました。個人の興味関心で班をつくってみたものの、班内で少しずつ違う個人の考えをまとめていくことは難しく、修正を重ねながら探究活動が始まりました。

【平成28年度 高I 探究班のテーマ】

班	領域	探究テーマ
2801	環境・食	「 農薬問題を考える～フラスマテクノロジーの農業応用～ 」
2802	食	「 日本古来の食習慣を世界へ 」
2803	医療福祉・食	「 高齢化社会における対策の普及 」
2804	環境	「 再生可能エネルギーの普及を図る～私たちの再エネモデル計画～ 」
2805	教育	「 カンボジアの教育の負のサイクルを断ち切る 」
2806	食	「 身近なところから食品ロスを減らそう 」

～Let's マシュマロチャレンジ!～

6月10日(金)のHRでは…
「スパゲッティ、マスキングテープ、紐、マシュマロを使ってできるだけ高いタワーをつくる(マシュマロはてっぺんにのせる)」という課題に取り組みました。不安定な材料のてっぺんにはマシュマロをのせなければならず、試行錯誤の連続です。一番上手なのは幼稚園児と聞いて驚きの声が上がりました。

この課題を通して、チームの協調性やプロジェクトの遂行に重要なことは何かを学びました！



～ I 年生の探究の様子をご紹介します(〃)/～

1 年先を行くⅡ年生が通った道…ついていけば大丈夫♪…ではない!! 思うようには進まないのが現実です。自分たちが率先して動かなければ、調べて検証して分かち合っ…を繰り返さなければ、何も進まないことに気が付き始めた I 年生。今後の探究活動の方向性を決めるにしても、アドバイザーを決めるにしても、「実際」を見聞き・体験しなければ決まりません。7～9 月は班ごとに調査の過程から有識者等を探しだし、現場訪問を実施。中にはアドバイスを頂きながらテーマに関わる試作を行い、分析や評価を加えながら探究を深めました。

東北大学工学研究科の金子俊郎研究室を訪れた 2801 班。「プラズマの農業利用」という最新技術を使えば問題解決ができるはず、という考えは浅く、そもそも農業についての理解が圧倒的に不足していることに気づかされました。

探究活動を始めた頃、まず何から手をつけ始めたらいいのかわからず、なかなか作業が思うように進みませんでした。しかし、東北大学の金子教授の研究室で金子教授から様々な視点からのアドバイスを頂き、自分たちが見落としていたポイントを指摘されました。この訪問をきっかけに探究活動を更に深めていきたいです。Aさん



JICA 東北を訪問したのは 2805 班。JICA の事業だけでなく、カンボジアの現状や日本からの支援状況を知るとともに、自分たちが何に留意して活動すべきなのかをワークショップ形式で学びました。

やりたいことがバラバラだった我が班は、一つの現実味のある方向性にテーマを持っていくことが大変でした。選んだ国もカンボジア。最初はカンボジアって…どこ?といった具合でしたが、JICA 訪問を通してカンボジアの現状を知り、今、私たちが理解を重ね同じ視点に立つことが大切であると感じました。後期、カンボジアの教育について十分力を入れて活動したいです。Kさん

2802 班は一汁三菜の試作、2806 班はコップフードバンクへの訪問、2804 班は福島産業交流プラザや福島駅の見学など、それぞれに探究活動が進みつつあります。

～ 9 月 24 日、クラス内中間発表開催～

プレゼンテーションソフト(PowerPoint)で作成したスライドを用いて、各班の探究状況を報告しました。質疑応答も活発に行われ、今後の探究活動に繋がる建設的な意見も交わされました。

前期を終えて…SGH は自分にとって新しい経験ばかりでした。何も分からず最初はとても不安でした。テーマが決まると、それについての知識をより深めるためにたくさん情報を集め、それによって1つの結論を見つけ出していくという作業をしました。情報をたくさん集めたり、専門の方々に聞くことにより、自分の知識の幅や、自分が見えてなかった視点に新たに気づくことが出来、自分の中で少しずつ成長していることを感じる事ができ、少し嬉しかったです。発表ではどうやったら相手に理解してもらえるかを考えた文を構成したり、話し方を意識するなど、将来に活かすことが出来る経験を沢山出来たように思います。また相手の意見をただ真にうけるのではなく、疑問を持つことの大切さも知ることができました。Mさん



Ⅱ年活動報告～サーバント・リーダーへと躍進！～

今回ご報告するのは…『社会福祉の視点から日本の高齢社会について考える』をテーマに探究活動に取り組む2705班です。3月の台湾研修では弘道福利基金会の運営する施設を訪問し調査(インタビュー)・探究を終え、日本でも多くの方々に話題にしていきたい活動をまとめ始めました。特に注目したのは以下の2点。

- ・老後も自力で生活できるように、筋力の強化を楽しみながらアップする健康促進ダンスの普及活動。
- ・『時間通貨』というシステム。(若い頃に弘道福利基金会の運営する施設等でボランティア活動した時間を、自分の老後に弘道福利基金会の運営する施設で使用ができるというもの。これは過去に日本で考案されたことで、日本では上手く実現できなかったことでしたが、台湾ではできているというシステム。)



この2点を受けて、班のメンバーは仙台市の介護施設を複数訪問。身近な福祉施設の現状をしっかりと把握し、改善できる部分や、新たに改革できることがあるのかを調査。ちょうどこの頃…NHKで放送された介護職員の方々の本音トーク番組を視聴。特に介護士さんの『私は介護士として、単純に老人の食事の補助や下の世話をしている訳ではない。人が最後まで尊重されて、幸せに人生を全うするためのお手伝いをしているのだ』『過去には介護職は花形の仕事だった。メディアのネガティブな報道が多すぎることでイメージダウンを増長させている』という言葉に、自分たちは何ができるのか…と、考えさせられました。メンバーはこの番組についても議論し合い、課題解決策について模索を始めた様子。そして、今、彼女たちは…♪どうなる♪どうなる♪どうなる…♪



【ビデオ作成のための打ち合わせ風景】

日本の高齢社会の現状と切り離すことのできない『介護』に視点を集中させ、若い世代にこそ知って欲しい現状を訴える！という行動に出ました。

名付けて…

『介護職の地位向上&イメージアップ作戦』

作戦の第一弾として介護士さんやケアプランナーさんのご協力を得て…

- ・メッセージビデオの作成！
- ・GO GLOBAL EXPO JAPAN2016での発表！

です。肝心のビデオは、現在、鋭意作成中！メンバーからストーリーを伺っていますので、少しご紹介しましょう。この第一弾ビデオは若い人対象です。構成は…

- ①介護に関わる事件・事故等の報道の現状
- ②実際の現場の様子(福祉施設等の介護士やケアプランナー、入居者の様子)
- ③介護に関わる人々の、社会に伝えたい思い
- ④若い世代に私たちは問いかける …等々

完成が楽しみです。メンバーは『私たちは、介護に関わる方々の心のメッセージを多くの人々に理解してもらいたいと思っています。』『高齢社会は無関心ではられません。いかに皆さんの視点を集められるかが大切だと考えています。』と、まさにグローバル・サーバント・リーダーへの成長が伝わるメッセージを頂きました。

12月に行われる東北大学でのGO GLOBAL EXPO JAPAN 2016で発表後、学園HPなどにもアップし、多くの方々に視聴してもらいたいと考えています。

～進め！論文(報告書)作成、今こそ団結力で乗り切る～

【報告書のスタイル(統一)と記入例】 A4 用紙！

用紙の余白…上下左右 25mm

貧困地域への効果的な食品の提供企業における問題点
～高機能栄養食品の将来に迫る～

和文は MS 明朝
英文・数字は century
全て 10.5 号
各部分の行間は
HGP コママ E 10.5 号

タイトルは 14 号
副題は OK

27LS09 班 鉢呂智子、齋藤智香子、工藤典子、多賀郁乃、菊池佳央子

班番号、班員
12 号

1. はじめに (探究の動機・目的・仮説・背景・探究において解決したい事柄も記載・分量 1 割)
最貧国であるβ国では、政治の不安定と民族・宗教の対立から国家経済が破綻。その後、国連を中心に、政治の安定化と経済の立て直しを図る介入が断続的に行われているが、民間団体を通じ、子どもの餓死が問題にあげられている現状が報告される。日本政府による経済的援助も大使館を通じて早急に動きがあったが、現場に物資が届くまでには一定の時間が必要である。(表 1 参照)



表 1-1: 政府の緊急援助における決定から物資提供・配布までの平均時間 (図表の枠は HGP コママ E 9 号)

日本の多くの企業も、労働力をβ国から輸入している現状から、直接的な支援を行っているが、近年の原油の高騰により先細りの現状がある。(表 2 参照) また、高機能栄養食品の開発費用は年々高くなり、1食あたりの単価も併せて高い。そんな中、はっちゃん食品は行政や民間に働きかけて、高機能食品の開発を行い、実際に、NPO 等を通じβ国α県γ村へ◆◆◆食を届けている。



表 1-2: 原油価格の推移



表 1-3: 高機能栄養食品開発費

しかし、次年度は届ける事が困難であることを知った私たちは、次年度以降もこの食品会社が継続した支援ができるよう、高校生らしい視点と行動力で、課題を分析し、実際に継続支援ができるプランニングを行い、試験的な運用を通じてデータを取りながら、現状に最も適した支援策を提供するため・・・

課題 1: 高機能栄養食品の栄養の構成割合を知り、代用材料で低コスト実現は可能か
課題 2: 運送費のルート変更や運送手段の工夫からコスト削減は可能か
課題 3: そもそも『はっちゃん食品』の活動は一般人に浸透しているのか
課題 4: 模範となるような他国の支援はないのか
・・・

これらの課題解決のため、日本国内では〇〇大学の△△教授、及び台湾では東海大学の△△先生にアドバイスを得ながら、次に述べる探究方法で本研究をすすめる。



あなたと共に創る未来
はっちゃん食品

2. 探究方法 (国内型・海外型を分け、つながりを持って記載する。分量約 1 割)

3. 探究の内容 (見出しを工夫し、パートに分けて記載する。本論文での位置付け度強。分量約 10 割)

4. 探究の成果・課題・展望・考察 (有識者による情報、実際の調査・探究、アンケートの分析、課題解決における解決策の提示までの思考の過程、新たな仮説等。本論文での位置付け度最強。分量約 5 割)

5. 結論 (課題解決策における解決策の提示及びまとめ。分量約 1 割)

6. 引用・参考文献

- Cord.org『アナとエルサとコードを書く』
”http://www.studio.code.org/s/frozen/stage/1/”, 2016 年 5 月 27 日
- サントリー食品インターナショナル『平成 26 年 12 月期決算』
”http://www.suntry.co.jp/softdrink/ir/pdf/2015-213_”, 2016 年 6 月 15 日
- ブライアン・キリー著、OECD 編、濱田久美子訳『よくわかる国際移民』明石書店、2010 年

7. アドバイザー及び担当教員

- 〇〇大学△△学部◆◆学科 ♪♪千子教授
- 仙台白百合学園中学・高等学校 教諭 ☆田☆子

・報告書の全体は、A4 用紙 20 枚以内。
・図、表、写真は適切な大きさを守る。
・担当教員にこまめに提出。

◎生徒に提示した論文(報告書)のスタイルです。課題解決型探究活動の現状までの歩みを一つの成果として、班で一つの論文を作成します。この形式は、田中ゼミで有名な中央大学経済学部で実施され、昨年度、本校のアクティブ・ラーニングの研修会講師であられた田中拓男(中央大学名誉教授)先生の、実践研究から推奨を

受けたスタイルに準じています。提出され次第、田中先生にもじっくりとご覧いただき、各班、アドバイスを受ける予定です。(現在の進捗状況は班によって異なりますが、まとめることで不足部分への対応も進んでいるようです。)

～発表・発信… 課題解決策の提示へ～

11 月 2 日(水)午後、宮城県仙台二華高等学校の公開研究会でポスターセッションに参加するのは次の 4 つの班です。(仙台二華高等学校は、平成 26 年度に SGH の指定を受けた SGH 一期校です。)

テーマ	発表のポイント
災害時における外国人への援助体制	開発したパンフレットの有用性と弱者への視点の大切さ。
企業の海外進出の際に生じる問題とは？	企業の社員として活動した経験を活かし、外国人労働者の視点も入れた問題点とその解決に向けて。
つなげよう飢餓と飽食の国々を	開発した米ぬかがんづきに至る経緯と今後の活動。
歴史認識を乗り越え、良好な関係を築くには？	日中台韓の交流企画に至る経緯と若者世代の認識。

また、12 月 11 日(日)GO GLOBAL JAPAN EXPO 2016(会場:東北大学)での高大連携企画で発表するのが次の 3 つの班です。発表の詳細は今後お伝えします。(会場は参加自由です。)

テーマ	発表生徒氏名(12 名)
女子教育の進展のために何ができるか ～ネパールに女子校設立を目指して～	女子を取り巻く問題は教育にたどり着く。教育を変革してこそ、貧困も解消に向かうのでは。
社会福祉の視点から日本の高齢社会について考える	介護における問題提起、ビデオで訴える。
バナナから見るフィリピンの経済格差	バランゴンバナナを知ってこそ開ける道もあるはず。

更に 3 月 18 日(土)、19 日(日)第一回 東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム in 杜の都が仙台白百合女子大学を会場に東北大学の共催で、東北地区の SGH 校対象に開催されます！本校生の活躍が期待されますね♪

サーバント・リーダーとの出会い



今年度のグローバル・サーバント・リーダーとの最初の出会いは・・・9月9日(金)6,7校時、外務省大臣官房 文化交流・海外広報課 課長補佐の河野美奈子さんです。河野さんは幼稚園から高校まで白百合(九段)の生徒でした。その後上智大学に進学され外務省に入省。フランス語が堪能であったため、フランス大使館やパリ・ユネスコ本部での勤務経験もあります。現在、双子のお子さんの育児とお仕事を両立されています。そんな河野さんは、外務省でのご自身のお仕事の様子や役割、キャリアの形成、女性として母として、そして白百合ファミリーの一員として、後輩たちにグローバルな視点の形成に大切なことは何かをご講演されました。

皆さんにお伝えしたいこと

視野を広げる

- 本を読む！とにかく読む！いかなる人生を送る上でも必要。
- 世界のできごとに興味を持つ。新聞は全ての基礎。
- 文化に触れる！絵画、舞台、映画、何でも。日本の文化も、世界の文化も柔軟に。
- 体力は一生の宝。いざという時の踏ん張りに(反省を込めて)
- 様々なヒトとモノに出会う！旅行でも留学でも仕事でも若いうちに海外へ！

自己を知る

好き・嫌い、得意・不得意、なりたいこと・やりたいこと

語学について

- コミュニケーション能力を磨く。大事なのは想像力。
- 外国語はツールであって目標ではない。
- 国際機関を目指すなら、できれば日本語以外に2カ国語。
- 発音が良いれば「英語が上手そう」に聞こえる。でも大事なのは、伝える内容。

皆さんにお伝えしたいこと (おまけ)

Twenty years from now, you will be more disappointed by the things you didn't do than by the ones you did do.

So throw off the bowlines.

Sail away from the safe harbor.

Catch the trade winds in your sails.

Explore. Dream. Discover.

Mark Twain

今から20年後、あなたは自分がやったことよりも、やらなかったことに対して、より失望することになるだろう。

だから、もやい綱を解き放って、安全な港から船を出そう。あなた自身の帆に貿易風をいっぱい受けるのだ。探検し、夢を見、発見するのだ。



女性として、先輩として、とてもかつこいい河野さんのお話は、生徒たちにとっても、大変大きな刺激になった様子。会場からは生徒の質問も活発になされました。

講演会終了後、応接室でご休憩されているところに・・・生徒が・・・あれ？あれ？ 早速質問に参上したのは、なんと、Ⅱ年5組の生徒たち。さすがの行動力です。河野さんは生徒の質問にもご自身の体験や外務省での情報等から、丁寧にお答えくださり、和やかな中にも活気あふれる座談会となりました。

外務省というと、各国の首脳会談等に関わる部署と言う漠然としたイメージしかなかったが、同じ白百合出身の河野さんから実体験を踏まえての、また、女性の視点でのお話を聞き、自分の視野が広がった。特に印象を受けたお話は二つある。一つは通訳・コミュニケーション時における分析力だ。河野さんはフランス語を駆使するが、通訳の時は、事前に話される話題について考察を入れている。コミュニケーションにおいても相手の伝えたいことを考えることは大切だと述べられた。相手の話を受動的に聞くのではなく、相手の気持ちをくみ取ることが、コミュニケーション力のアップにつながると思うので、私も心がけながら実践したい。二つ目はユネスコでの体験談だ。国際機関に憧れはあるものの、実際に働いてみるのはどの様なのが、ずっと気になっていた部分でもある。お話で一番驚いたのは、一日に80本ものメールが送信されて来ること。しかもそのメールの半数以上が英語。一見、キラキラしている職業だけれど、その一方ではとても多忙ということが判明した瞬間だった。更に河野さんは、日本語以外に2カ国語以上は学ぶことが大切であると伝えてくれた。高校生の私には、まだまだチャンスも時間もある。この講座で知り得た知識やマインドを忘れずに、多くの事に挑戦しようと思う。そして今のうちに、自分を輝かせることのできる職業を、しっかり調べていきたいと思う。(Hさん)

アクティブラーニング～哲学対話の実践～

今回は LS コースのⅡ年生を対象に『倫理』の授業で実施された『哲学対話の実践』の報告です。立教大学の文学部教授である河野哲也先生を招き、知識偏重型の教育を脱するため、各地で導入が進められている『哲学対話』の実践を、『倫理』の授業担当者である本校の吉田綾太先生が実施。当日は中村百合子先生(立教大学准教授)、得居千照先生(筑波大学大学院)も参加されました。

実施日: 2016年7月1日(金)2校時/多目的室 対象生徒: Ⅱ年5組(29名)

事前準備: 『倫理』の授業内でシャロン・ケイ、ポール・トムソン共著、河野哲也監訳『中学生からの対話する哲学教室』(玉川大学出版部、2012年)の抜粋(「付録B ソクラテスの裁判と死、およびプラトンのイデア論」)を読み、「正しさ」、「美しさ」、「愛」などの根拠について各自で文章をまとめた。また、『NHK 世界遺産 100』より「デルフォイの考古遺跡(ギリシャ)」を視聴し、哲学の概要について学習を行った(すでに生徒はギリシア思想について学習済み)。

当日の活動内容: ファシリテーターの河野哲也先生が講義を進める。以下に概要を示す。

①目的および方法の確認(10分)

そもそもソクラテス以来の「哲学」が目的とするのはなにか、ということについて簡単に説明。次に「哲学対話」の目的を理解するため、哲学プラクティス連絡会が作成した動画「こどものための哲学対話」を視聴。今回の活動がどのように行われるのかを学習した。なお、この動画は、現在 youtube 上でも公開されている。

②哲学対話の実施(30分)

クラスを二つのグループに分け、円状に椅子を並べた(各グループにファシリテーターとして河野先生、得居先生が入る)。はじめに、『中学生からの対話する哲学』の抜粋「デザイナー・ベイビーの可否」が配布され、その内容を黙読したうえで、読み取ったこと、考えたことを自由に議論。その際、議論がかたよらないための用具として「ぬいぐるみ」が利用された。(「ぬいぐるみ」は発話者を特定の1人にするだけで「話す」ことだけでなく「聞く」ことにも意識を働かせるようにするための仕組み。)生徒たちはファシリテーターからときおり示される「問いかけ」に答える形で、終始リラックスした様子で対話に参加。なお、「デザイナー・ベイビー」の可否は、「美しさ」の基準、人工性などについての議論に至ったほか、「美容整形」の可否など、生徒にとって身近な話題にも言及する形となった。



③反省(10分)

ファシリテーターからの呼びかけに基づき、次の2つの観点から挙手による反省を行う。

1. いつもより、自分の考えを伝えることができたか。
2. いつもより、友人の考えを聞くことができたか。

哲学対話が第一に目指すのは、ある問題についての一定の結論を導くことではなく、参加者同士が自由な議論の中でお互いを理解し、ともに解決に向かう姿勢を形成していく事にある。生徒たちはこの2つの観点について「できた」、「まあまあできた」、「できなかった」の3点で答えていた。

全体の反省: 今回の実践の効果をより深めるためには、今後の授業や特別活動などにおいても継続的に取り組んでいく必要がある。しかし、「倫理」の授業が週2時間と限られ、板書教授による学習が中心となっている現状で、このような本来あるべき哲学学習の姿に親しむ時間を持てたことは、大変によい機会であった。

参考文献: 『子どもの哲学 考えることをはじめた君へ』(毎日新聞出版、2015年)
『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』(河出ブックス、2014年) 等々

光! SGH 生徒の活躍…受賞の報告!!

まず最初にご報告するのは…Ⅱ年5組の石井美土里さんです。昨年開催された第68回宮城県高等学校英語弁論大会では第2位でしたが、いよいよ今年、第69回宮城県高等学校英語弁論大会で堂々の第1位を受賞！併せて11月に実施される第64回東北6県高等学校英語弁論大会への参加が決定しました。石井さんの弁論の題名は『スーパーグローバルハイスクールにおけるアクティブラーニングについて』です。まさにSGHの本校での活動体験が石井さんの主張につながったようです。是非お読みください。



Active Learning in a Super Global High School



Last year, my school was designated as a Super Global High School (or SGH) by the Ministry of Education. Out of over 5,000 high schools in Japan, only 123 schools were selected as SGH, and there are only three such schools in Miyagi. Through the SGH program, students are expected to develop mutual understanding with people of different cultures and nations, pursue grassroots experiences, make action plans and implement them, and learn and practice the spirit of service. At my school, the students of my class divided into seven groups, and each group started pursuing a different kind of research program on topics related to environment, medical welfare, food, education and business enterprise.

My group chose to research the problems of Japanese companies which are operating overseas. Our goal was to find root causes for difficult problems of such enterprises and propose solutions. We considered the economic, social and cultural situations both in Japan and in the foreign country. We soon found how differences in language ability or cultural expectations are common sources of problems, and they are not easy to overcome. But we knew that nothing would happen if we gave up from the beginning. In fact, we learned from this stage of our activity that to give up was the same thing as losing a business chance. By analogy, we cannot ask newborn babies to walk, but in time they start to move and get around by themselves. We felt the same: even though we could not reach perfect understanding at the beginning, we thought we could get results so far as we put in the right effort.

In the first stages of the project, we also thought we needed to become members of a company if we truly wanted to understand what international business is like. So we created a company which sells tea. It wasn't easy for us to start such a new enterprise, especially since we had to select the tea, create a brand name, and make a design for the tea package. For our tea manufacturer, we decided to collaborate with a Taiwanese company. And owing to support from our teachers, the first steps of our program went smoothly.

Toward the end of our project's first year, we visited the tea company on an SGH Study Tour in Taiwan. Naturally, we used English for all of the meetings during the tour. In fact, it was very difficult for us because we weren't used to speaking in English. However, we tried our best not to rely on others and instead did most everything by ourselves. We soon realized our English abilities improved considerably, especially our speaking speed and pronunciation. We also realized that the best way to communicate would have been to speak in the local native language. However, in Japan, we don't have a chance to learn any Chinese until high school. Therefore, our English education became much more important than ever.

After we returned from Taiwan, our attitudes to attend English class in school have changed because we realized that English is the most important thing to communicate with foreigners. Special knowledge is required at each business scene, but nothing can be done without English. Through the SGH program, our thinking and points of view have also become more logical and mature from various influences. Specifically, I've learned the difficulties of cooperating with my team members because each of us has a different style of thinking. We've reached mutual understanding only through many, many internal discussions.

Since the project is ongoing, we cannot yet forecast what our research conclusions will be. We are still trying to solve the problems step by step. And I think that we may not be able to fully overcome the complex problems of language barriers and cross-cultural misunderstanding. However, so far as we live in a social world, we always need to meet, compete, and cooperate with others face to face. In this context, communication is clearly both the starting point for everything and the key for finding solutions. My classmates and I still have a lot of work to do, but I think we've all learned a lot from the SGH program and will never forget this precious experience.

いかがでしたか？石井さんからは次のようなコメントを頂きました。

私が参加した第二部は、海外の居住経験者や家族に英語圏出身者いる生徒たちの部門です。私の母が英語圏と見なされている香港出身ということで、この部門での参加となりました。私自身、海外が幼稚園の時しか無く、正直、この部門での参加はとてもしんどいがあると最初は考えていました。しかし、壁を打ち破ってこそそこに成長があると思っているので、LS で培った英語力を駆使し、発音・感情表現に力を入れて練習しました。内容は、SGH とは何か。課題解決のために企業の一員となり、商品開発を通し学んだことは何か。台湾での探究活動で分かった事実。協力することの大切さ。そして私自身の思考力・判断力・表現力がどの様に変化したのか。視点を将来に向けたとき、今の世の中のグローバル化に、高校生としてどの様に対応(スキル・マインド)していくのかをまとめました。11月には宮城県の代表として東北大会に参加します。更にハイレベルの戦いになると思いますが、自分らしくしっかりとスピーチし、次につながる結果を出していきたいです。(石井美土里)



次は同じくⅡ年 5 組の佐藤沙耶さんです。沙耶さんは一般財団法人教育支援グローバル基金の主催する『ビヨンドトウモロージャパン未来リーダーズサミット 2016』に応募。高倍率の選考を経て東京で開催されたサミットに参加しました。大学生や他の県から参加した高校生らとチームを組み、『若者が輝ける社会』の実現に向けた提言を作成し、最終日に、政府関係者やビジネス・NGO・メディアなどの各界のリーダーの前でプレゼンテーションを実施。来場者による投票の結果、沙耶さんの班が見事優勝！

12月1日、同大会のアンバサダーである安倍昭恵(内閣総理大臣夫人)の招聘により、総理公邸で提言発表を行います。

それでは沙耶さんに直撃インタビューです(^)/



Q：この企画に応募したのはなぜですか？

沙耶さん：BEYOND Tomorrow に応募したのは、『アフリカに農業学校を創るという夢を本気で応援してくれる仲間に出会った』というポスターの一文を見たことがきっかけです。もし、これに参加したら、SGH で活動している私の班(女子教育の進展のために何が出来るか～ネパールに女子高設立を目指して～)の探求活動に活かせるかもしれないと思ったからです。

Q：3日間のサミットでの様子や、その中の沙耶さんの役割を教えてください。

沙耶さん：実際に行ってみると、サミットの参加者の多くは、それぞれが濃いバックグラウンドを持っていて、胸が痛むほど辛い経験をして来た人も沢山いました。だからこそ、偏見を持つことなく色々なディスカッションを重ねる事ができましたし、本音で語り合えるからこそ、信頼関係が生まれ、どんな意見を言っても必ず受け止めてくれたので、私もそうです。皆考えていることをしっかり伝えられたと思います。また、これは私が感じたことなのですが、経験は強い！ということです。色々なことを経験・挑戦して来た人は、視野が人一倍広いし、様々なことを知っていて、根本的な情報量が違います。そのため、一つ一つの言葉に本物の重みを感じました。私は、SGH の活動で養われた発言力と主体性で、進んでディスカッションにも参加できました。SGH の『教育』をテーマに探求していたからこそ分かる意見を伝えることが出来、私なりの経験でグループに考えるきっかけや、多方向の視点を与えることが出来たと思います。

Q：テーマ「若者が輝くことが出来る社会の実現」のもと、沙耶さんたちが提案した「教育についてのプロジェクト」について教えてください。

沙耶さん：まず、各自が今までどんな人生を送って来たのかを 2 時間ほど話し合いました。その中で私は『ネパールに、女性が世の中を牽引できるようになるための女子校設立』を目指して、SGH で探究活動していることなどを伝えました。それがきっかけで話が深まり、日本の高校生も、男女問わず、自分の意見を言えない人が多いのでは・・・という話になりました。私達が通う『学校』は、まさに社会の縮図(ミニチュア)です。そのミニチュア社会のどこかに、自分の意見を言えるようになれない原因があるのではないかと考えました。「口では言えないことも文字なら書けるかも・・・？」というように、今の学生は、自分の考えを誰かに伝えたい・発信したいと思う時、口では上手く伝えられないけど匿名でなら書けるかもという人が多くいます。そこで、私たちは2つのプランを持つ学校を考えました。その名も『いいね！社会っていいね！』です。これは匿名で誰でも自分の考えを発信できるようなシステムのことです。

Q：なるほど・・・そして、2つのプランとはどのようなものですか？

沙耶さん：まず1つ目です。学校に目安箱を設置することです。目安箱を設置している学校は本校も含めて多いと思うのですが、しかし、どうせ書いてもやってくれないからなど、考えを発信した後のレスポンスがないのを理由に意見が集まらず失敗する例も多いと聞きます。そこで私たちが提案する目安箱は、集める意見のテーマを設定して意見を発信し易くすると同時に、意見を掲示板やWebで公開して、校内関係者または地域の方々などからコメントなどを頂くことで、『他者からなんらかの意見のフィードバックをしてもらう経験ができる』というシステムです。名前は目安箱ですが、生徒なら誰でもアクセス出来る様な PC 上の目安箱と、直接目に触れるアナログタイプの目安箱&掲示板も考えました。次に2つ目は SNS を利用したタイプです。これは、生徒が学校生活や社会に対する日頃の考えを、学校の先生と生徒で運営する SNS 上にいつでも発信できるシステムです。このシステムは、韓国の大学で実際に行われているもので、多くの大学生が文面を通して他人が抱える悩みや問題に共感し、更には韓国中の様々な年代の人々にもこの声を発信しているため、地域や社会から大きな反響を呼び起こしています。

このように、アクションは小さくても、自分の考えを発信し他人に受け入れられるという経験値を、少しずつ高めていくことがこのプロジェクトの目標です。自分の考えを受け入れて貰える経験が増えれば、多様性の中での不安が減り、本来自由に表現できたはずの個性が、閉ざされることなく、しかも豊かになると考えています。学校が変われば社会も変わる。関わる人々の意識も変わる。そう願ってこのプロジェクトを提案しました。

Q：沙耶さんの視点が活かされたプロジェクトですね。確かに、もっと自由に意見を言えて、受け入れられているという実感が学校生活の中の様々なシーンで増えてくれば、何より本人の自信につながりますよね！SNS のシステムは、管理・運営面が整えば、導入し易いかもかもしれません。さて、今後について教えて下さい。

沙耶さん：プロジェクトの最終プレゼンテーションでは、私自身、今まで SGH の活動で、相当数の発表をこなしていたので、しっかりと聴衆に訴える事が出来、大きな達成感でいっぱいでした。結果、最優秀賞(優勝)を頂き、12月1日には総理公邸でもう一度発表できます。SGHで活動していなければ、BEYOND Tomorrowに応募していませんでしたし、SGHで色々な経験をしていなければ、班に貢献することもプレゼンテーションで役に立つこともなかったと思います。優勝した時は本当に嬉しかったですし、再度、発表のチャンスを与えられたことは本当に光栄です。多くの班の代表ですから、皆の気持ちもしっかり込めて、協力しながら説得力のある発表をしたいと思います。

今後色々な事に挑戦してアクションを起こし、高校生という立場だからこそ出来ることや発信できることを、進んで行いたいと思います。

ありがとうございました。12月1日、総理公邸でのプレゼンテーション、しっかり頑張ってくださいね！応援しています。(後でこっそり総理公邸の内部、教えてね(^)/何か興味津々・・・♪)

Let's challenge !

ここでは、本校の SGH プログラムで学んでいる生徒たちが、日々様々な事に挑戦し、多くの経験をもとに、自らの立場でアクションしている様子を報告します！今回登場するのは・・・

まずⅡ年5組の松沢希映さんです。彼女は(株)Good Try JAPANのキャリア教育プログラム『世界で自分の将来を考える旅 in シリコンバレー』に応募しました。シリコンバレーは世界で最も失敗に寛容で、多様性に富んだ地域と言われています。現地の企業を訪問し、活躍する日本人の先輩達からキャリアや生き方について学びつつ、現地の高校・大学生とセッションし、自分の将来の在り方を考える7泊9日の宿泊型プログラムです。松沢さんは、日頃のボランティア活動や SGH での探究活動などを面接で訴え、見事、東北地区6名の枠に入り79万8千円(参加費全額を企業が負担)の支援を受け、参加が決定します・・・

夢や目標を叶えるために乗り越えてきた数々の試練をエネルギーとし、『やらなければならない事をやるべくして今、シリコンバレーにいるのです！』と話される講師の方々の言葉に、強い衝撃と深い感銘を受けました。全国から運命的に、奇跡的に出会えた11人の仲間と共に、本音で語り合いながら、シリコンバレーで世界を、未来を考えた9日間。『価値ある時間は自分が創る』。『やらなければいけない事』の先にある『やりたい事への強い気持ち』とそのための『たゆまぬ努力の継続』。今後の自分の強い武器となる大きな課題を渡されたとき、自分の中のスイッチが切り替わった様に感じました。講師の方々の、言葉の重み、瞳の奥の強い信念、颯爽とした行動、ありのままの自分を受け入れてくれた仲間。最高の216時間に感謝!!



続いての登場は…次年度宮城県で開催される『第41回全国高等学校総合文化祭みやぎ総文2017』の文芸部門で生徒実行委員長を務める、Ⅱ年5組の樋野菜々子さんです。すでに今年、プレ大会である北海道・東北文芸大会宮城県大会では参加84校286名の実行委員長として、研修の企画・運営を実施。彼女の文芸にかける意気込み、そして次年度の総文祭への思いを語ってくれました。



『文化部のインターハイ』とも言われる全国高等学校総合文化祭が、次年度は宮城県で開催されます。私は、そのみやぎ総文2017の文芸部門生徒実行委員長として、今年はプレ大会等の企画・運営に日々尽力しています。他県から集まる生徒達が十分に力を発揮でき、互いに高め合いながら、一つの作品を創りあげられる様な企画や運営。更には実行委員長という立場での行動と発言。振り返ってみると、どれをとってもどの場面においても、SGHで培われた思考力や判断力、表現力が生かされ、常に臆することなく役割を全うすることができています。また文芸部での活動とSGHでの経験が、自分の中で相互に良い影響を与えていると実感しています。

いよいよ来年は本番。他の委員や参加者達をしっかりと支えられるよう、盤石なる準備を重ね、サーバント・リーダーとしての精神を胸に抱きつつ、眼差しは天空に…

宮城の熱い夏を全員で創りあげてみせます！

ここでⅡ年5組理系女子の登場！まずは『東北大学科学者の卵』研究基礎コース全10回の講義を受け、毎回提出するレポートによる評価で、最優秀賞を頂き、更に研究を進め、『日英サイエンスワークショップ』でも高い評価を得た二人の登場です。一人目は安部愛乃さん！『東北大学科学者の卵』での研究について語ってくれました…。

専門的な研究についての講義をもとに行う、研究基礎コースでのレポート作成では、各分野の理解に関わる視点の形成と、各事象に対する自己の見解の表現方法を徹底的に学ぶことができ、研究する事の基礎力を養成できました。選抜された発展コースでは、地デジアンテナの試作や電波の性質の学びを通し、応用的に電波資源活用の考察を深め、難解なことも多い中、ますます研究することの大切さを学びました。最先端の研究設備の中で、教授陣から直接受けるご指導には、毎回、多くの発見と科学を体感する事の喜びを感じ、大きな達成感で一杯です。今年度7月からは、重点コースに選抜され、粒子飛行時間測定器(MRPC)の製作およびデータ解析、性能評価を行っています。これからも様々な対象について、真摯な態度と多くの視点で研究を継続し、身に付けることが出来た解析的な思考や発想を、SGHの活動にもしっかりと応用し、解決策を導くことに貢献したいです。



次は先ほども登場した石井美土里さんです。『日英サイエンスワークショップ』での活動について語ってくれました…。

SGHで企業の海外進出における問題点を探究中の私にとって、関わる相手国のバックボーン(文化・宗教・経済・思想等)の理解は交渉成功の第一歩であると主張していたのに、まさか自分が英国の人々の言動を理解できず、互いのズレに驚くなんて想像もしていませんでした。しかし、共同生活の中で互いの事を理解し合い、共同作業で課題解決しながら友情を育めた今、この素晴らしい機会に参加でき、自分自身が一段と成長できたと実感しています。講義はすべて英語。探究では東日本大震災でも問題視された、放射能汚染による地質調査における放射線量の測定を実施。結果の考察には、教授も含め未解明なことも多く、まだまだ人間の無力さを感じ、科学の進歩の大切さを痛感しました。多くの学びと発見、今持つ知恵を集中し、解明に努めた時間は最高の体験です。最終の英語によるプレゼン。教授陣のExcellent!は、この夏最高のプレゼントです!!



最後に登場するのは菅原菜穂さん。SGHで磨かれた文章力を武器に、『宇宙が好き!』を論じた作文で全国10名枠に選抜。JAXA主催の角田宇宙スペーススクールでの研修を報告してくれました。



一般人が入れない角田宇宙センターの研究実験施設で、講義・実習・実験を繰り返して、ロケットエンジンについての学びを深めた2泊3日はまさに宇宙漬けの日々。宇宙工学の知識はもちろん、宇宙好きな仲間やJAXA職員の方々との出会いで、将来に対する視野が断然広がりました。思い出は、SGHで培った思考力と判断力、表現力をフル回転させて臨んだ最終ディベート。これからの宇宙開発について白熱した議論を展開させました。宇宙開発において『国際協力』は難しく、課題は山積み状態。しかし、宇宙に魅了され宇宙についての研究を始める人は、どこの国にもいるはず。他国との開発合戦による利潤に振り回されないよう、平和に貢献できる宇宙開発に視点を合わせ、若い世代の私達が率先して共同開発を心がければ、人類の新たな未来を宇宙開発によって生み出せるのでは…。扉を開く鍵は私たちの手の中にありそうです。

◎本校のSGHの活動はHPでもご覧になれます。
<http://www.sendaishirayuri.net/>

企画制作は・・・

SGH委員会
ですってヨ!



えっ?

あっら〜あ!!

次回もお楽しみに...✦✦✦

哲学対話...楽しみましょ(^_^)/



仙台白百合学園高等学校

〒981-3205 宮城県仙台市泉区紫山1-2-1

TEL.022-777-5777 FAX.022-777-3555

